

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



今年もまた、山すそのシイの木が黄色く芽吹く季節がやってきた。温暖な伊豆などではもう盛りも過ぎたと思いが、京都ではいまがちょうど見ごろ。東山の山全体が、まるできなことでもまぶしたかのようになえている。

単純な黄色一色というのでもな

い。木によって、また光の加減によつて、茶色がかつて見えたり、あるいは緑色に近かつたりもする。新緑が「緑色」などということは決してないことをあらためて思い知らされる。

惜しいのは、植林された針葉樹の黒っぽい樹影が、新緑の黄色

シイの木の受難

景観切り裂く効率社会

を切り裂いているところだ。それに加えて最近、山すそほとんどん竹に侵略を受けている。これらがなければ、新緑の景観はいまのそれとはまったく違っていたに相違ない。

これから梅雨入りころにかけて、シイの木は花シーズンを迎える。雌花は地味だが、雄花の部分

は遠目にも黄色く見えるよつになる。シイの木の花は、甘ったるいよつな、独特の香りを出す。とくに、これからの湿度の高い時期には、その香りは強く、かつ遠くまで届く。

シイの木は葉が厚く、かつ色も濃いのでその樹陰は暗く、鬱蒼たる雰囲気を感じ出す。西日本の鎮

守の森の独特の景観も、シイの木の森ならではのものが多い。黒い樹影に鮮やかな黄色の樹冠。このコントラストがじつに美しい。

ところで、シイの木は、現代ではせいぜいシイタケの原木に使われるくらいで、総じて、役に立たない木にされてしまっている。材木としての需要は小さい。ほか

にも、見るべき用途もない。だがかつて、その種子であるシイの実は、救荒食料として貴重であった。他のどんぐりとは違って強いアクをもたず、フライパンなどで炒って殻をむくだけで、簡単に食べることが出来る。意外とたんぱくな味がする。しかし今ではその味を知る人もほとんどいな

い。

何でも効率でものごとを判断する現代は、シイの木には受難の時代でもある。吉田テフ子作詞の戦前の唱歌「お山の杉の子」では、植林されたばかりのスギの苗木が、そばにあったシイの木に見くだされながらも、やがてはシイの木を見下ろすよつな大木になり、材木となって国の役に立ってゆくといふ。

植林が奨励された時代だった。当時の世相、森林に対する社会の見方がよく現れた歌詞である。シイの木は、こうして、国を挙げて排除された。そして、かつてこの人間行為が、今になって山すその景観を切り裂いている。それは、ある意味での、「森からの復讐」だともいえよう。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。